

第2話 維新の戦乱

先づ鳥羽伏見の戦いに幕軍が敗れ、朝敵の名を付けられた前將軍慶喜は、
そうこう
 倉皇として(あわてて)江戸に帰って、ひたすら謹慎して恭順の意をあらわす。
 江戸城の明け渡しも無事に済むが、徳川氏の旧恩を思って従わない者がいた
 ために、ついに上野戦争、奥羽戦争、函館戦争などが続いて起こって、
 明治2年5月に至って初めて全国が平定する。

よしのぶ にゆうきょう けつ
 慶喜が入京に決する

明けて慶応4年(この年の9月8日に改元して明治元年となる。)正月朔日、断然、君側の姦を除こうと決心した前將軍よしのぶ徳川慶喜は、12月9日の復古の朝令ふっこ ちょうれい以来、薩摩藩士がしばしば威権をほしいままにし、しきりに暴虐ぼうぎやくな行いに及んだりした罪状五ヶ条をあげて、「かかる所業しょぎょうは天人共に憎むところであるから、右の奸臣共かんしん ひきわたを引渡しのご沙汰さたを下さるように。万一、ご採用にならない時は、止むを得ず誅戮ちゅうりくを加えることにします」という旨の倒薩とうさつの表ひょうを認め、先づ大目付たきがわはりまのかみともさと滝川播磨守具知たづさにこれを携えて上京させて、自分は後から兵を率いて入京することにした。

こうして2日に先づ先鋒ま せんぽうとして大阪を発したのは、会津、桑名の兵に旗本の兵および大垣藩の兵を合わせて、総勢約15,000でした。いかにこちらが、恭順きょうじゆん むねを旨としても、むこうが陰謀を事としている以上は、それとは到底とうてい並び立つことが出来ないから、先づその奸臣共ちゆう かんそくを誅して君側を清めようというのが、思うに、慶喜のこの時の本志ほんしであったろう。もとより朝廷に対しては、その忠誠の心は少しも渝かわらなかったのです。

ほん ふしみけいび
 薩長2藩の伏見警備

ところが一方、京都における薩長の2藩は、前にも少し述べたように、初めから慶喜の下阪(大阪に下ること)をもって、大阪城を根拠地として朝廷に対抗する野心やしんのためと見做していたし、また、武力をもって徳川氏の勢力くちを挫かなければ、真の改革を決行することは出来ないとも確信していた。

慶喜が大阪に退しりぞいた数日後の21日に、たまたま幕府の歩兵1,000余人が伏見奉行所ふしみ ぶぎょうしょに集まって、民家を掠め、狼藉ろうぜきの行為があったとの知らせに朝廷方が驚いて、薩州、長州、土州、芸州の4藩にその地の巡邏警衛らけいゑいを命じた。土州、芸州の2藩は、辞して兵を出さなかったのに、薩長の2藩は、好機会じこそ至れりとはばかりに進んでこれに任じて、やがて朝命ちようめいを奉じて入京する慶喜をそこで食い止めるは勿論、苟くも徳川派のものは、一人もこの関門を過ぎて京都に足を入れさせまいと決心していた。

ほうげき
 薩長軍の砲撃

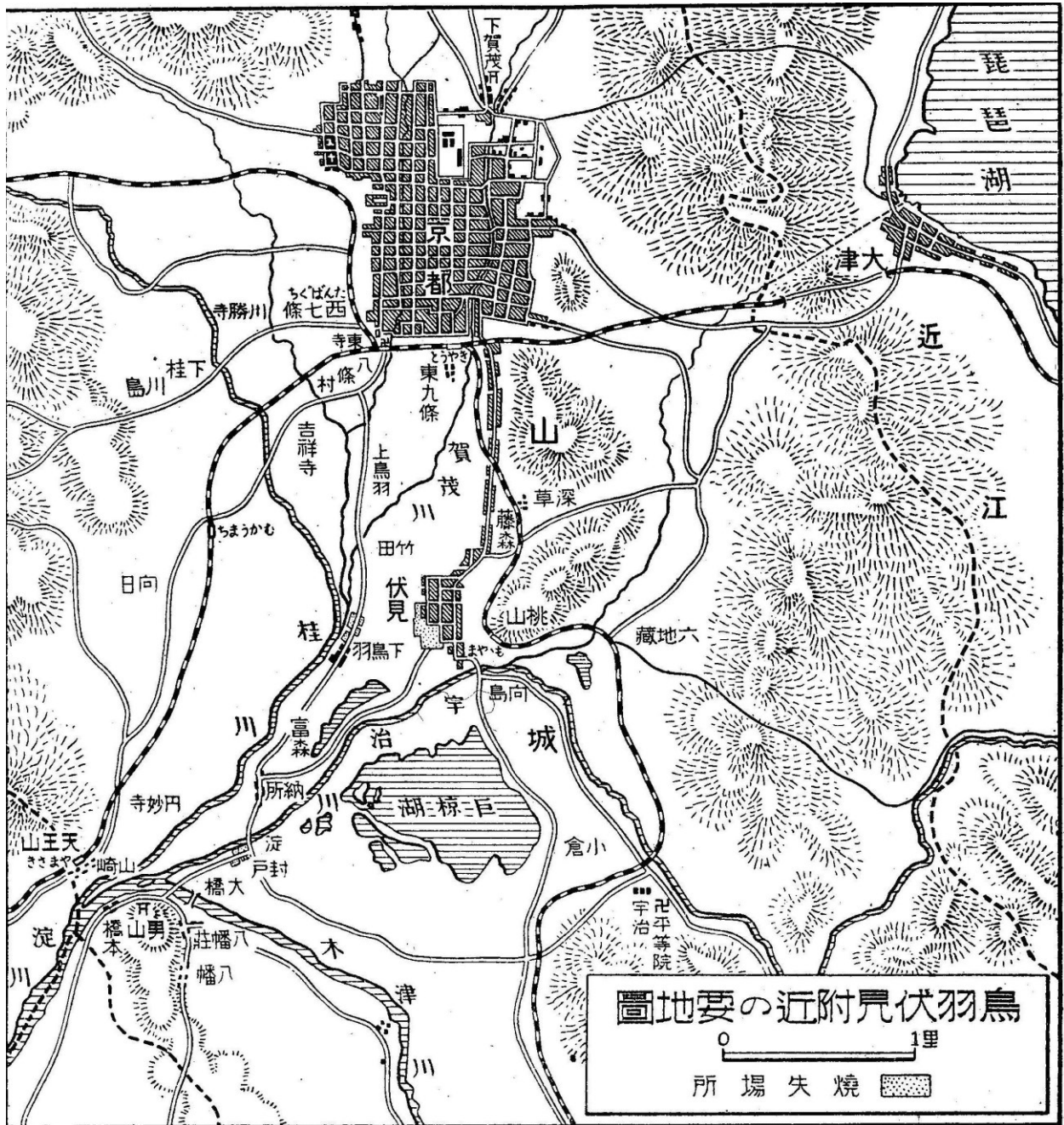
ところへ、幕軍の先鋒せんぽうとして鳥羽街道を進んで来た桑名藩、見廻り組および大垣藩の兵ら約5,000が、正月3日の午後4時ごろに鳥羽の中橋とば なかのはしまで来たのです。薩長軍さつちようは2,000余人でそこを守っていたが、朝命を受けてこの地を守っているのであるから、決して通過させることは出来ないといって幕軍の進軍を

第2話 維新の戦乱

拒み、押問答に時を費やす間に、城南離宮前と、離宮後と右側の竹林の中との3隊に分けて陣営を構えて、やがて、突然大砲を連発して幕軍を潰走させた。夜に入って幕軍は逆襲したが、三面から包み撃たれて、また敗れた。

伏見街道を進んだ会津藩、新撰組および旗本の兵ら約10,000もまた、同日の殆ど同時刻に伏見の京橋まで来て、薩、長、土の3藩の兵2,000余にその通過を拒まれた。

止むなく一時進軍を中止して、幕府の重職と相談しようとしているうちに、俄かに鳥羽の砲声が聞こえて来ると、忽ち両軍は砲門を開いて戦いを始めた。しかし、ここもまた遂に幕軍が敗れて退いた。



幕軍の油断と薩長の不意打ち

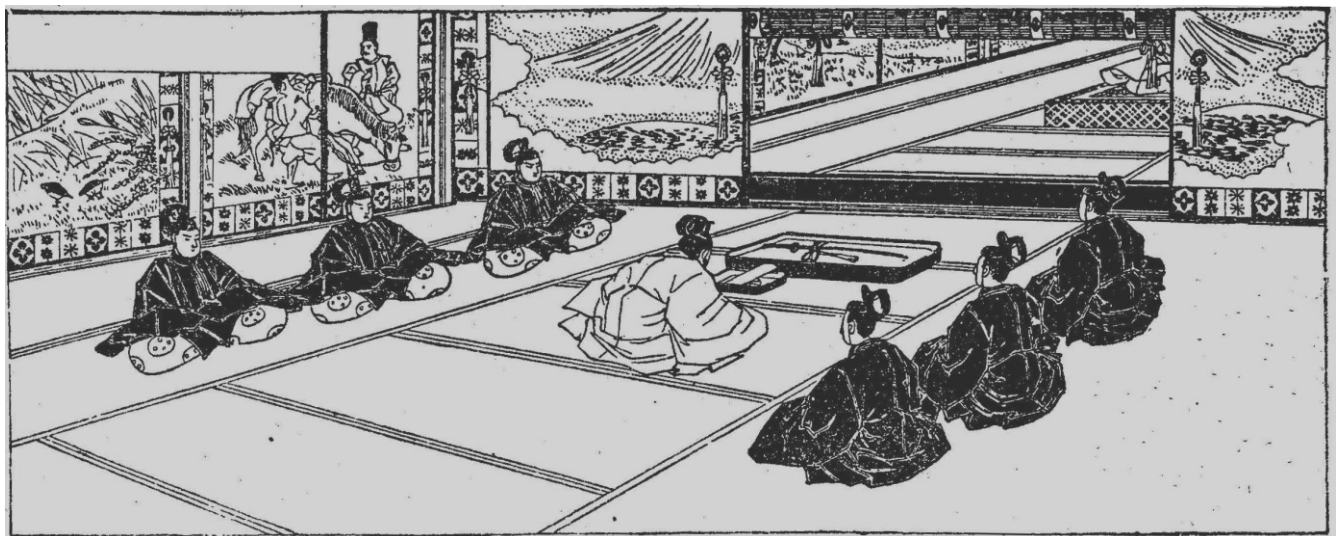
とはいえ、これには何の不思議もなかったのです。なぜなら、幕軍は隊伍を組んで進んでは行つたが、もともと途中で戦争などがあるとは予想していなかったため、何の準備も計画もしていなかった。これに反して、薩長側では、是非ともここで食い止めようと、予てから十分の用意をして待ち受けていた

第2話 維新の戦乱

のであったからです。 実際に、幕軍が全く油断していたところを、薩長側は不意討ちを食わして、これを走らせたのです。

いやいや、そればかりでは無かった。 薩長側では鳥羽伏見の一戦に、勝利を必ず得るとは思っていなかったのですが、もしも敗れる時には、天皇を奉じて、山陰道から遁れて広島に出て、そこを行在所とする計画さえも立てていたのです。 現に薩摩藩の西郷隆盛が立てた計画には、議定中山忠能は天皇を奉じて山陰道に向かい、参与岩倉具視は京都に留まって十分に応戦することが、その一か条となっているし、又、長州藩の片野十郎の立てた計画には、速やかに芸備へ出発の事や、兵庫に停泊している自分の藩の軍艦を速やかに備後の海のほうに廻航させる事やが記されている。

実に薩長側では、よしんば戦争が数年にわたろうとも、いかなる困難に会うとも、断じて幕府を倒さずにはおかないと固く決心していたのです。



にんなじのみや よしあき こまつのみやあきひと せつとう たま
仁和寺宮 嘉彰親王 (後の小松宮彰仁親王) に節刀を賜う

征討大將軍の任命

従って、3日の鳥羽伏見の開戦の知らせが京都に達するや否や、その夜、薩摩藩の参与大久保利通は、断然と、倒幕の議を奉じて大いにこれを主張した。 ついに三職会議がこの議に決した結果、朝廷では、4日、仁和寺宮嘉彰親王 (後の小松宮彰仁親王) を征討大將軍に任じて、錦旗、節刀を授けて出陣させたが、これと共に、西園寺公望を山陰道鎮撫総督に任じ、翌日、兵を率いて京都を西に出発させた。

これが、万一の、幕軍が勝利を得て京に北上する場合の下準備であることは前に述べたところで、既に皆さんもおわかりでしょう。

ところで、実際の戦争の状態はどうなったか？

錦旗を見て、幕軍敗れる

3日に不意を討たれて、鳥羽、伏見から破れて退いた幕軍は、4日には陣形を立て直して取っかえし、大いに奮戦して勝敗をも争うほどでしたが、この日、征討大將軍に任ぜられた嘉彰親王が、翌5日、錦の御旗を翻して進むに及んで、官軍の士気が大いに振るったのに引きかえ、幕軍の意気は全く沮喪し

た。

こうして、この日、幕軍の本営を置いた淀城よどが落ち、6日には、徳川氏のために山崎を守っていた藤堂家とうどう（津藩ちようし ほう）が朝旨あさむねを奉じて官軍にに応じて、八幡やわた、橋本の線まで退いた幕軍を、突然に横から砲撃ほうげきしたので、狼狽ろうばいした幕軍はついに全く敗れて、枚方ひらかたに退いた。

よしのぶ 慶喜、江戸に帰る

この時、慶喜はなおも大阪城を出ずにいたが、仁和寺宮にんなんじのみやが錦旗きんきを翻ひるがえして出陣になったと聞くと、大いに恐縮きようしゆくし、こうしては、たとえこちらから戦端せんたんを開いたのではないとは言っても、大いに我が天朝てんちょう遵奉じゆんぽうの趣旨しゆしに反したわけで遺憾いかんに堪えないと、乃ち大目付すなわを馳せて、令はを諸軍れいに伝えて、大阪城たいきやくに退却たいきやくさせることにした。その上に、自分は容保かたもり、定敬さだあき、勝静かつきよおよび外国奉行がいにこくへいぎやう、目付めつけ、医師いしらを随したがえ、その夜の12時に密かに城を出て、八軒家はちけんやというところから苦船くるふねに乗って天保山沖てんぽうざんおきに至り、翌7日、幕府の軍艦かいようまる開陽丸でんじやうに伝乗でんじやうして、ついに海路を江戸に帰った。

大阪城の将士らは、あとでこれを知って大いに驚いたが、慶喜よしのぶが残した布告文ふこくぶんに一先づ東帰ひとま とうきの上で、追々おいおいもうしき申聞ける議ぎもあるから、銘々めいめい同心戮力どうしんりくりよく、国家のために忠節ちゆうせつを抽ぬきんずるようにと有ったので、さては江戸において後の計画あつもあろうかと、いづれも急いで跡あとを追って江戸に帰った。

せいとう だいごうれい 慶喜征討の号令

一方、朝廷方では、鳥羽、伏見の両道の戦いに、幕軍があまりに脆もろかったのを寧ろ案外むし あんがいな事にもしたが、なお、或いは大阪城あるに拠よって反抗するかも知れないと思ったので、未だ容易らっかんに樂觀はしなかった。のみならず、7日には議定、参与が列席の上、公卿および諸大名を召して、慶喜征討せいとうの号令せんぶをさえ宣布した。

曩さきに恭順きやうじゆんの誠まことを表ひょうすと称しょうして、大阪城に引き取ったのは素よりの詐謀もと さぼうで、今、旗下き かの者を率い、剩あまつさえ、前に帰国を命じられた会津、桑名の兵らせんぼうを先鋒せんぽうとして天子の前を犯した以上は、慶喜の叛状はんじやうは明白であるから、止むを得ず朝敵としてこれの追討ついでうを仰せ付けるというのです。

しょうだいみやう きよしゆう 諸大名の去就

この時、岩倉具視いわくらともみは諸大名に向って言った。「若し徳川氏の旧恩もを憶い、朝命ききゆうおんに服おもさないものは、速やかに大阪に赴すみいてこれを援けるか、さもなければ国に帰って、糧食りやうしょく、弾薬だんやくを送れ。王事おうじに勤めようとする者は京都とどに留まって命めいを待て」と。そして、翌8日の午前8時までに、その態度たいどを決めさせた。

8日の朝になって、在京の諸大名は皆朝命じゆんぽうを遵奉むねする旨ほうとうを奉答した。しかもこの日に、慶喜が江戸に帰ったことも明らかになり、又、大阪城も完全に官軍の手に帰したのです。

えど めざ せいとうけいかく 江戸を目指した征討計画

こうして、京畿地方に全く心にかかる事がなくなると、慶喜せいとうに対する征討計画がぜんは、俄然、江戸を目ざ

第2話 維新の戦乱

してどしどしと進められた。これより先き、橋本実梁^{はしもとさねやな}を東海道鎮撫総督^{ちんぶそうとく}に任じて、5日に、先づ桑名を指して、肥後藩の兵を率いて出発させたが、9日には、岩倉具定^{いわくらともさだ}を東山道鎮撫総督^{たかくらながすけ}に任じて高倉永祐^{たかくらながすけ}を北陸道鎮撫総督^{ごりょう}に任じた。10日には、征討大号令および旧幕府の領地をもって御料とする旨の布告書を三條橋および荒神口橋に掲示し、同時に慶喜^{こうじんぐち}、容保^{よしのぶ}、定敬^{かたもり}、勝静^{さだあき}ら27人の官位を取り上げた。

こうして、高倉永祐^{たかくらながすけ}は正月20日に北陸道に向かい、岩倉具定^{いわくらともさだ}は翌21日に東山道に向って、それぞれ兵を率いて京都を出発した。東海道鎮撫総督^{はしもとさねやな}橋本実梁^{じん}は、23日に伊勢の四日市に陣して、桑名の藩主まつだいらさだちか^{まっだいらさだちか}、ちやくしまんのすけ^{ちやくしまんのすけ}、つみ^{つみ}、しゃ^{しゃ}、こう^{こう}、こ^こ、おさ^{おさ}松平定敬^{まつだいらさだちか}の嫡子万之助が罪を謝して降を請うて来たのを許して、28日にその城を収めた。

東征大総督の任命

2月3日、天皇はその頃二条城に置かれていた太政官代^{たじょうかんだい}に行幸^{ぎょうこう}の上、御親政^{しんせい}の詔^{みことり}を下され、6日には東海、東山、北陸3道の鎮撫総督を、おのおのその道の先鋒総督兼鎮撫使と改めて江戸に向わせ、9日には、更^{あり}に有栖川宮熾仁親王^{すがわのみやたるひと}を東征大総督に任じ、聖護院宮嘉言親王^{しょうごいんのみやよしこと}を海軍総督に、沢為量^{さわためかず}を奥羽先鋒総督兼鎮撫使に任じた。そして参謀以下は、薩長を始め20余藩の兵をそれぞれ分けて属させた。

新撰組の反抗

こうして東海、東山、北陸3道の軍は、ひとしく江戸を指して進軍した。

このうち東山道軍は2軍に分かれ、1軍は信州から甲州に入り、3月6日、甲府に抛ろうとしていた旧幕府新撰組の近藤勇^{しんせんぐみ}、こんどういさみ^{こんどういさみ}、ひちかたとしぞう^{ひちかたとしぞう}、かつぬま^{かつぬま}、かしお^{かしお}、ついでぎ^{ついでぎ}、土方歳三らと甲府の東約12kmの勝沼の柏尾山で戦ってこれを破り、追撃して江戸郊外の内藤新宿^{ないとうしんじゅく}に着いた。土佐の板垣退助^{いたがきたいすけ}がこの軍の参謀でした。もう1軍は薩摩の伊地知正治^{いぢちまさはる}が参謀としてこれを率い、上州(上野国、群馬)から武州(埼玉)のほうで幕兵と戦ってこれを破り、進んで板橋駅に着いた。

東海道軍も2軍に分かれ、共に進んで池上に着いて本門寺に陣した。

北陸道軍も進んで千住駅に着いた。

そして大総督の宮は錦旗、節刀を奉じて、2月15日に京都を発し、3月5日に、海路を駿河に至って、駿府^{すんぶ}に総督府を置いた。薩摩の西郷隆盛^{さいごうたかもり}らが参謀でした。

このように、3道の官軍が破竹の勢いをもって進軍して来て、すでに江戸の郊外の4駅の地を固めると、大総督府はいよいよ3月15日をもって江戸城の総攻撃をすることに定め、諸道の官軍にこれを令した。

トコトンヤレ節

ところで、ちょっとここに挟んで皆さんにお話しておきたいのは、この時、官軍の将士が3道を行進中にさかんに歌ったというトコトンヤレ節のことです。今その1、2の文句を挙げると、

いってんばんじょう^{いってんばんじょう}、てむ^{てむ}、やつ^{やつ}、はづ^{はづ}、うちだ^{うちだ}
一天万乗のみかどに手向かいする奴をトコトンヤレトコトンヤレナねらい外さずどンドン討ち出す

さつちょうと^{さつちょうと}
薩長土トコトンヤレトコトンヤレナ

おんま^{おんま}
宮さま宮さま御馬の前のひらひらするのは何じやいなトコトンヤレトコトンヤレナ

ちょうてきせいばつ^{ちょうてきせいばつ}、にしき^{にしき}、みはた^{みはた}
ありや朝敵征伐せよとの錦の御旗ぢや知らないかトコトンヤレトコトンヤレナ

第2話 維新の戦乱

というように、これは長州藩の^{おおむらますじろう}大村益次郎が西洋軍隊の^{ぐんか}軍歌から思いついて、同藩の^{しながわやじろう}品川弥次郎に作らせたものだというのですが、これが官軍の士気を鼓舞するのに役立ったことは非常なものであったといわれる。昔、^{じんむ}神武天皇が、大和の^{とみ}登美の^{ながすねひこ}長髓彦を討たれた時に、勇ましい軍歌を作られて、部下の^{はるか}勇気を一層^{おも}励まされたことなども^お遥かに^{はるか}想起^{おも}こされます。

しかし、一方、それほどまでもに朝廷方が^{ちやうてき}朝敵として大きく見ていた^{ちやうてき}徳川慶喜は、この時、いったいどうしていたか？

^{よしのぶ きやうじゆん}慶喜の恭順

彼は正月7日に大阪湾を^{かいやうまる}発した^{かいやうまる}開陽丸で、11日に品川に着いて、^{はまごでん}浜御殿（今の^{はまりきゆう}浜離宮）に上陸し、翌12日に江戸城に帰ったが、鳥羽、伏見の戦いによって、^{ふほんいせんぼん}不本意^{ちやうてき}千万にも^{ちやうてき}朝敵と見られるようになったのを心から^く悔い、ただただ^{きやうく きんしん}恐懼、^{きやうじゆん}謹慎して、^{い ひやう}恭順の意を表していた。

勿論、^{さばくは}旗本や^{りふじん}佐幕派の大名などには、朝廷の^{きび}徳川氏に対する^{まんまん}圧迫の理不尽なほどにも^{きび}厳しいのに^{まんまん}満々と不平を抱いて、「今日の^{いわた}所謂官軍は、^{かぎ}錦旗の^{かく}蔭に隠れた^{さう}薩長勢に外ならないから、これに対して頭を下げる必要などは少しもない」と、^{すすめ}慶喜に^{さいきよ}勧め^{はか}めて再挙を^{しりぞ}図ろうとするものも多かった。しかし、彼は^{がん}頑として一切これを^{しりぞ}却けた。

^{こと}殊に、数年前から、ともすれば^{えんじよ}英国（イギリス）が^{えんじよ}薩長を援助しようとするのに対して、幕府に好意を寄せていた^{こうし}仏国（フランス）の公使^{さいきよ}レオン・ロッシュが、わざわざ江戸城に参って^{すす}慶喜に再挙を勧め、武器も、兵士も、^{たいよ}軍艦も^{たいよ}仏国から貸与して大いに援助するので、開戦するようと言った。この時に^{えん}慶喜は公使に、我が国体の諸外国のそれと全く異なる^{ゆえん}所以を説明し、たとえ公卿、大名から出た意見であっても、一旦^{ふくじゆう}勅命として下る時は、絶対に^{ほんぶん}服従するのが日本国民の本分である、と言って、きっぱりとその^{けんさく}建策を^{しりぞ}却けたといわれる。

^{かつやすよし しゆせんろんよくあつ}勝安芳の主戦論抑圧

とはいえ、旧幕臣の多くは、^{しき}慶喜の恭順を喜ばず、なおも頻りに主戦論を主張したが、^{ひと}ひとり^{かつやすよし}軍艦奉行の^{かいしゆう}勝安芳（^{つと}海舟）は、夙に海外諸国の事情に通じて、よく^{じせい}時勢を^{たつかん}達観していたので、どこまでも、^{せい}慶喜の^{かんてつ}恭順の誠意を貫徹させようとした。それで、正月23日の夜、幕府に^{かいかく}大改革が^{だんこう}断行され、彼が^{ぜんけん}陸軍総裁となつて、幕府の^{ゆだ}全権を^ま委ねられると、先づ第一着に^{しゆせんろん}大会議を開いて、^{おさ}主戦論を抑えた。

もし^{こうせん}官軍と^{せい}抗戦すれば、或いは^{しんちやう}徳川の^{せい}勢威を^{しんちやう}振張することは出来るかも知れないが、これより国内が^{ぶんれつ}分裂して大乱がはじまり、ついには^{おうべい}欧米の^{うかが}窺うところとなつて、^{いन्द}印度や^{ふくてつ}中国の^ふ覆轍を踏むに至るであろう

というのが、彼が主戦論を抑えたひとつの^{ろんきよ}論拠でした。実際、彼に取っても、亦、主人の^{まね}慶喜に取っても、この時に最も心配でたまらなかつたのは、^{むし}徳川氏の存亡よりは^{かんしやう}寧ろ外国の^{まね}干渉を招きはしないかと



^{かつやすよし} 勝安芳 ^{かいしゆう} (海舟)

いう事だったのです。

仏国が幕府に援助を申し込んだことは前に述べたが、万一、官軍と幕軍との間に戦いが始まって、兵器弾薬などの欠乏から、英国が薩長側にこれを供給するようなことにでもなれば、勢い幕府側も仏国の援助を受けて、結局はわが国が英仏両国の戦場とならぬとも限らなかったのです。なおこの時、北方にはロシアも機会をねらっていた事を忘れてはならない。実にその頃の西洋諸国は、いづれも虎視眈々として、苟しくも乗ずべき機会があれば、東洋において自国の勢力を張ろうとしていたのです。しかも、邦人の多くは海外の事情に疎く、少しもそれを気にしていなかったので、思えば危険千万な話であったと言わなければなりません。

さて、慶喜は万事を安芳に一任すると、自分は2月11日に上野の寛永寺内の大慈院に移って、専ら恭順の意を表した。この時の彼の心中を察して、旧幕府の坊主を勤めていた大竹三悦の詠んだ歌がある。

君のため民のためにとひとり身を 忍が岡にすみぞめの袖

というので、いさぎよい慶喜の意中を最もよくあらわしたものと伝えられている。

和宮のご歎願

こうして慶喜は、ひたすら謹慎して朝命を待つと共に、書面を静寛院宮（和宮、孝明天皇の妹、將軍家茂の夫人）に送って、つぶさに恭順の心中を述べ、朝廷への執成しを依頼した。

それで、宮にも御手づから書面を認められて、慶喜の書面と共に女官をして橋本東海道先鋒総督兼鎮撫使の許に持って行かされた。それには、徳川氏が朝敵の汚名を残して滅亡する事を深く残念に思われ、「何とぞ私へのご憐憫とおぼしめし、汚名を清め、家名相立ち候ように、私命にかえて願いまいらせ候」と嘆願された。もし徳川氏が滅亡した暁には、自分も死ぬつもりで覚悟はしているものの、「朝敵と共に身命を捨てては、朝廷に恐れ入り候事に候」と、まことに悲しく痛ましい心のうちを述べておられます。

輪王寺宮の哀訴嘆願

又、この時、上野の寛永寺に居られた輪王寺宮公現法親王（嘉彰親王の弟で、後の北白川宮能久親王）も、わざわざ駿府の大総督宮のところまで行って、徳川氏の為に哀訴嘆願され、天璋院夫人も使者を遣わされ哀訴し、老中稲葉美濃守正邦も嘆願書を出し、彰義隊と称する一隊を組んだ旗本の有志らも同盟哀訴申し合わせ書を作って、寛大な処置があるようにと嘆願した。

朝廷方でも松平慶永が徳川氏の赦免について頻りに尽力したが、そのころの新政府の中心勢力となっていた薩長が、その政策を遂行する上に、慶喜の罪を飽くまでも問う態度を執っていたので、どれもこれも皆功を奏さなかった。

かつ わせんりょうよう じゅんぴ
勝の和戦両様の準備

勝安芳は、ちっと、静かに、この成り行きを見ていたが、折から、幸いにも、諸外国の公使たちが、日本のこの状態を、御門の政府と将軍の政府との争いと見做して、局外中立を宣言したので、彼が最も心配していた外国の干渉は、一先づこれを招かずとも済みそうな形勢となって来た。

そこで安芳は、もし官軍が、飽くまでも慶喜の恭順を蹂みにじって、どうしても徳川氏を滅ぼそうというのであれば、その時こそ快く雌雄を決しようと、一方でその準備をも整えた。即ち、彼は官軍が江戸城に迫ってくるのを待って、自ら江戸八百八町に火を放ち、官軍を焼き討ちにすることに手筈を定めて、その放火には、市中の侠客らを当たらせることにした上に、房総2州の漁民に命じて、江戸に大火が起るのを見たら、すぐに舟を漕ぎ寄せ、市民を乗せてこれを救いださせる事にした。

とはいえ、彼は平和の解決の望みをまだまだ捨ててはいなかった。大総督府の参謀である西郷隆盛が、彼とは元治以来の知己であって、互いにその人柄を尊敬し合っている仲ですから、この人ところ直接に交渉して、慶喜の赤心を貫徹したいと、ひそかにその時機の到るのを待っていたのです。

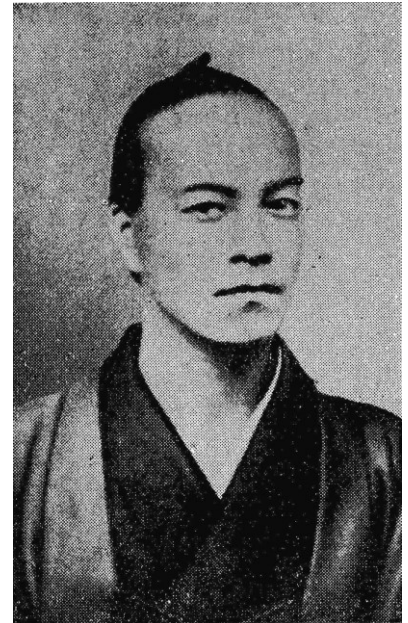
やまおかてつたろう すんぶ つかい
山岡鉄太郎が駿府に使う

この時、たまたま旧幕臣の山岡鉄太郎（鉄舟）がある日、慶喜に謁して、その恭順の真意を尋ね、慶喜が心から謹慎しているのを知ると、正心誠意の恭順が天朝に達しない筈は無いと、乃ち死を決して大総督府に到り、江戸君臣の実情を大総督宮に訴えようと、これを安芳に謀った。安芳はちょうど西郷との交渉の機会と掴もうとしていたところでしたので、山岡の決心が固く、その意気の壮烈なのを見て大いに喜び、「よし。では、西郷に書面を書くから、それを持って行くがいい」と、そこで

「無偏無党王道蕩々矣。今、官軍鄙府に逼るといえども、君臣謹んで恭順の道を守るは、我が徳川氏の士民といえども、皇国の一民たるを以ての故なり。且つ皇国当今の形勢は昔時と異なり、兄弟牆にせめげども、外の侮りを防ぐの時なるを知ればなり。」

という書出しで、江戸の実際の状態を述べ、軍門の参謀諸君が、「能くその情実を詳らかにし、その条理を正されん事を」望む旨の書面を認めて、さきに三田の薩摩藩邸を襲撃した際に生け捕りにした薩摩の藩士益満休之丞を副えて、3月5日に出発させた。薩摩の藩士を伴わせたのは、多分、官軍の陣地を過ぎて行くのに便宜もあろうかと思ったためでしょう。

さて、山岡は、この時、すでにその先鋒が、六郷川（多摩川の最下流）の先まで来ていた官軍の陣地の間を、或る時は、「朝敵慶喜の家臣山岡鉄太郎、大総督府に至る」と大声で断って通ったり、或る時は益満の後ろに随い、薩摩の藩士を装って通ったりして、昼夜兼行、幸いに途中で咎められることもなく

やまおかてつたろう てつしゅう
山岡鉄太郎（鉄舟）

して、9日に駿府に着いて、西郷に面会を求めた。

七か条の処分案

西郷が出て会うと、山岡は安芳の書面を渡して、且つ慶喜の恭順の態度をつまびらかに説き、寛大な処置をされるようにと熱心に願った。西郷は、山岡の説くところによって、初めて江戸の事情を詳しく知って、その儀ならばとして、大総督宮の指図を請い、七か条の処分案を山岡に示し、徳川氏がよくこれを遵奉するならば、平和に局を結ぶことが出来ようと言った。

その条件の中には、江戸城を明渡す事、軍艦や軍器を残らず引き渡す事、城内居住の家来を向島に移して謹慎させる事や何かがあったが、それらの六か条はともかくとして、慶喜を備前藩に預けるといふ一か条だけは、徳川恩顧の家臣として、どうしてもお請け出来ないと言ふと、西郷も尤もな事だとこれには同情して、その点は自分において誓って穏便に取計るように努力しようと言った。

こうして山岡は、首尾よく使命を果たすと、すぐにあとから江戸に急行するという西郷と別れて、今度は、西郷から与えられた陣中通行券を持って、益満と共に大急ぎで江戸に帰った。そして、事の次第を安芳に報告した。安芳は、山岡の働きによって漸く官軍との間に意思の疎通したのを喜び、示された処分案の七か条を少しづつ修正した嘆願書をつくって、西郷と会見する時の到るのを待っていた。

この時、官軍はすでに3道共に進んで、総攻撃の予定の日も近づいていたので、西郷も今は一刻も猶予ならずと、山岡を帰すと急いで後から出発して、3月13日に芝高輪の薩摩藩邸に入った。

勝と西郷との会見

そこで、安芳は書面を送って面会を求め、翌14日、いよいよ勝と西郷とは、和戦両様の策を秘めて、そのいづれかに決するために、芝、田町の薩摩の別邸で会見した。

勝は先づ前述の嘆願書を差出し、従来徳川家が数百万石を領したのは、もともと政府の経費に充てるためであったので、すでに大政を返上した上は、当然、朝廷に請うて処分を仰ぐ積もりである旨を述べた。且つ、江戸は皇国第一の大都会であるのに、一家の存亡の故をもって多くの罪のない市民を殺すのは、主人慶喜の欲しないところであること、及び、今や外国関係もいよいよ多端であるから、この際に殊に国内の平和を望むのは、即ち皇国を維持する所以であって、独り徳川家の為のみに言うのでは無いことを述べて、公平至当の処置をされるようにと懇願した。

西郷は快く嘆願書を受けたが、もとより自分の一存で決答を与えるわけには行かない事であるから、大総督宮に言上しましよと答えて、そして部下の桐野利秋、村田新八の兩人を招き、急いで進軍の猶予を3道の官軍に令させて、翌15日に断行する筈であった江戸城総攻撃は一先づこれを中止させる事とした。

なお、この時の会見について、勝は後日につぎのように書いている。乃ち我より西郷氏に趣旨演舌の末、同人静かに答えて、『総督に言上すべし』と言ひ、従容平素の如く、談他に及び、毫も大事に臨むの体なく、面色温和、襟度寛大、一点私念を挟まず、嗚呼、東京の後日ある、実にこの人の意匠に出づる也」と。旧幕府をしょって立ったさすがの勝も、西郷の偉大な人格には今更のように敬服したのを

示しています。

西郷の寛大説が通る

さて西郷は、勝と別れると直ぐに出発して駿府に向かい、16日に大総督府に帰って復命した。総督宮は乃ち西郷を京都に遣わされ、勅裁を請わされた。

20日に、西郷は太政官代に開かれた三職会議に、勝から受け取った嘆願書を提出して評議を請い、慶喜を死罪にしなければ朝廷の威厳が立たない、という厳罰説に対して、「恭順謹慎飽くまで朝命にしたがうとしているにもかかわらず、強いてこれに白刃を加えようとするのは王者の執るべき道ではない、宜しく死一等を減ずるのを至当とする」と、固く寛大説を主張し、朝議もついにこれに決して、勅裁を仰ぐことが出来た。22日に京都を出発、25日に駿府に着し、大総督宮に謁し勅裁の趣を申し上げ、29日に江戸に至って、東海道先鋒総督兼鎮撫使橋本実梁、同副使柳原前光にこの趣を伝達した。

そこで4月4日、橋本、柳原の両卿は勅使として、旧幕府の重臣らが静肅鄭重を極めて迎える江戸城に臨んで、以下の勅命を田安中納言慶頼に伝えた。

第一条 慶喜去る12月以来、天朝を欺き奉り、剩さえ兵力を以って皇都を犯し、連日錦旗に発砲し、重罪たるに依り、追討のため官軍差し向けられ候処、段々真実恭順謹慎の意を表し、謝罪申し出候に付いては、祖宗以来二百余年、治国の功業少なからず、殊に水戸贈大納言勤王の志業浅からず、かたがた以って格物の思し召しあらせられ、下の条件実行相立ち候上は、寛典に処せられ、徳川の家名立て下され、慶喜の死罪一等を宥さるゝの間、水戸表へ退き、謹慎罷在るべき事、

第二条 城明け渡し、尾張藩へ相渡すべき事、

第三条 軍艦銃砲引渡し申すべく、追って相当差し返さるべき事、

第四条 城内住居の家臣共城外に退き、謹慎罷在るべき事、

第五条 慶喜の叛謀相助け候者重罪たるに依り、厳刑に処せるべきの処、格別の寛典を以って死一等を宥さるべくの間、相当の処置いたし、言上すべき事。

但し万石以上は朝裁を以ってご処置あらせられる事。

という五か条で、なお、両勅使から、今後7日以内、即ち来る11日までに各条件の処置をするようにとの厳命があった。

田安慶頼は謹んでこれを拝受し、慶喜に伝達すべき旨を答えたので、勅使は即日に池上の本門寺の本陣に帰った。

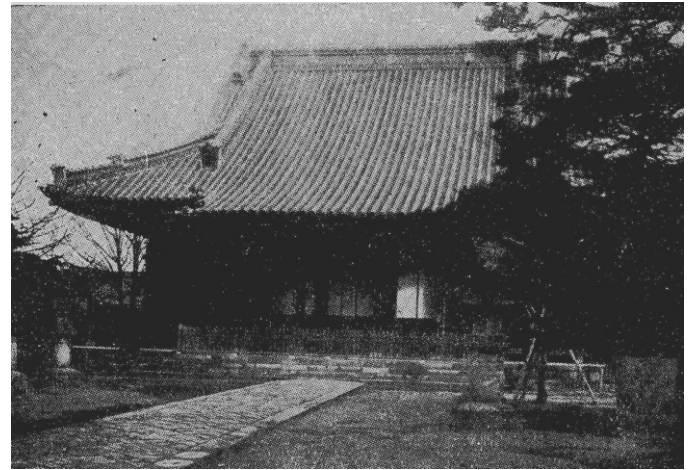
江戸城の明渡し

慶頼は勅命を慶喜に伝えた後、7日に書面を以って、慶喜が天恩の辱きを拝誦し、感泣の外他事無き旨のお請けを申し上げ、寛大なご処置を謝した。そして、五か条の条件をも、それぞれ間違いなく実行されるようにと落ちなく処置方の手配をした。

こうして4月11日に、いよいよ江戸城は明け渡される事となったので、橋本、柳原の両卿は、一隊の護衛を率い、西郷と共に入城して、兵器を収め、肥後藩をしてこれを守らせ、城は尾張藩たくに託して守らせることにして、再び本門寺の本陣に帰られた。

よしのぶ みと きんしん
慶喜 水戸に謹慎する

上野の大慈院あに在って、謹慎していた前將軍慶喜は、この日、江戸城の受け渡しが無事に済んだ知らせを勝から聞くと、黒木綿くろもめんの羽織はおりに、白い小倉縞こくらじまの袴はかまを着け、麻裏草履あさうらぞうりを穿いて、顔色がんにしよくはややおとろおとろ瘠せ衰え、ひげはぼうぼうと生えたままで、端然として歩いて大慈院を出た。



うえのかんえいじ なかどう
上野寛永寺 中堂

（明治8年にもとの大慈院址に建てたもの）

数十人の護衛が前後を守って、肅々しゆくしゆくと向島むこうじまの水戸の下屋敷かごに至り、そこから駕籠に乗って水戸に向ったが、途にしてこれを見た者はいづれも涙を流して、お気の毒たんせいなど歎声はつを發しないものは無かったといわれる。鳥羽、伏見の戦争以後、心にもなく朝敵の汚名を受けたが、慶喜はいささかも勤王の志きんのうを渝こころざしえず、ひたすら恭順の意を表して、謹んで罪を謝し、朝廷に対してよく国民の執るべき態度を謬あやまらなかつたために、幸いにして難問題も平和に解決され、江戸百万の市民も兵火の難を免れ、徳川家もまた無事に存続することが出来たのです。君国を思う慶喜の至誠まぬかが、ついに大きく報われたのだと言ってよいでしょう。

のち
慶喜のその後

なお、これは後の事ですが、ついでに慶喜の其の後の事をもここに述べておこう。彼は慶応4年（明治元年）7月に、水戸から駿府に移り、ついで先づ其の謹慎を解かれ、続いてその罪をも宥ゆるされたが、もはや再び政治の事には携ふたたわろうとはしなかった。同30年10月、東京に出でて住むことになると、特に明治天皇のお召しを受けて、天皇および皇后に拝謁する光栄に浴し、爾来、格別の優遇を賜ったが、同35年6月には、特に公爵こうしゃくを授けられ、従一位、勳一等に叙せられた。大正2年11月に77才で薨じた。

えのもとかまじろう だつそう
榎本釜次郎の脱走

さて、話を前に戻すと、旧幕府の軍艦も、「勿論、江戸の開城と共に引渡す筈になっていたのですが、この引渡しはその日に行われなかった。というのは、幕府の海軍副総裁榎本釜次郎えのもとかまじろう（武揚）が予ねて強行な主戦論者であったところから、その日は風波が荒いからとして、引渡しを延ばしておいて、その夜、軍艦8隻を率いて品川沖を脱走し、房州（千葉）の館山湾たてやまわんに逃れて、ひそかに江戸の形勢を窺けいせいうことにしたからです。

第2話 維新の戦乱

とって、これを官軍がそのまま許す筈が無かった。勝に向って厳重にその違約を責めたので、勝は大いにこれを憂え、4月17日に自ら房州に急行して榎本を諭し、ついに艦隊を品川沖に廻航させて、同月19日に、その4隻を官軍に引渡し、あとの4隻を徳川家の所有として、やはり榎本にこれを監督させることにした。

おとりけいすけ どうせい 大鳥圭介の動静

とはいえ、江戸の開城を喜ばない者は外にもまだ多かった。旧幕府の歩兵奉行大鳥圭介は、同志およぶ部下の者凡そ2,000人を率いて、一時、下総の国府台に拠ろうとしたが、更に転じて日光に向かい、すでに宇都宮まで来ていた東山道先鋒の官軍と、4月16,7日、先づ小山に戦ってこれを破り、ついで宇都宮城に迫って、これを陥れた。



えのもとかまじろう たけあき
榎本釜次郎 (武揚)

しかし、間もなく官軍が大挙してこれを回復に来ると、彼はここを棄てて日光に奔り、東照宮に拠って、今市に出陣したりしたが、糧食、弾薬が欠乏したところから、ついに閏四月朔日、陰阻な六方越の閑道を踰えて会津に落ちた。

こんどういさみ ひちかたとしぞう 近藤勇と土方歳三

又、さきに甲斐の勝沼で官軍と戦って敗れた近藤勇は、その後、土方歳三らと共に下総の流山に拠って、江戸の形勢を窺っていた。彼が勇猛果敢の士であることは、文久3年の春に將軍家茂の上洛に随って行って、京都で新撰組の長となつてから、幕府に反抗する浪士の捕縛や暗殺に頗る凄腕を揮つたので、世に広く知られていた。

それで官軍でも、今また彼が流山で新たに活動を起こそうとしているのを不気味に思ったのだが、彼には勇氣があつても、謀のないのを知っていた東山道の大軍監香川敬三が、一隊の兵を率いて千住まで進み、謀を持って彼を誘い出して、捕らえて、板橋の本陣に帰って、これを斬つたので、土方は急に兵を集めて、大鳥の軍に合して、彼もまたついに会津に落ちた。

こうして、江戸の近郊に拠って官軍に反抗しようとした旧幕府方の将卒は、ことごとく一掃されたが、江戸の市中にはなお彰義隊の連中が残っていた。彼等は言われもなく官軍に反抗の態度を執つて、しきりに乱暴狼藉を働いたりした。しかし、一たい彰義隊とは何か？

しょうぎたい けっせい 彰義隊の結成

この一隊が主君慶喜のためにその冤罪を哀訴し、寛大なご処置を嘆願した事は、すでに前にも少し述べたが、初めは、実にこれを目的とした3,4の幕臣が発起して同盟を結んでいたのです。ところが、慶喜が退隠した上野の山内に彼等が屯集するようになると、幕府の遊撃、歩兵、砲兵、純忠、精忠、臥龍、旭、万字などの諸隊および関宿、高田、明石、小濱、高崎、結城、会津などの諸藩士も続々と来集した。

第2話 維新の戦乱

そうぜいおよ 総勢凡そ 3,000 余人の大きな団体となった上に、かくおういん ぎかん かんえいじ しつとうしょく りん 覚王院義観という寛永寺の執当職が、さきに輪のうじのみやこうげんほう 王寺宮公現法親王のお供をして駿府の大総督府に嘆願に行った折に、すげなくこれをはねつけられたのをいきどお 憤っていたところから、官軍に反感をいだき、大いに彰義隊のために便宜をはかって、これを激励さえたので、ついに上野は彰義隊の根拠地となり、ひがしえいざんかんえいじ じょうかく 東叡山寛永寺は、さながら彼等の城郭みたいになった。

その折から、あけわた 江戸城は明渡されて、あわれ さび すがた みと 慶喜は哀れな淋しい姿で水戸に向って出発したのです。彰義隊の連中は、涙をもってこれを見送ると共に、今更のように慷慨悲憤して、せんおう にく 薩長の専横を憎み、市中で官軍の兵士に出会ったりすると、これに喧嘩を吹きかけたりして鬱憤を晴らしていたのだが、ついにかくおういん ぎかん せんどう の りんのうじのみやこうげんほう 義観の煽動に乗って、輪王寺宮公現法親王を奉じて官軍に反抗することにした。

一方、官軍は、すでに全く江戸城を手に入れ、関東の大勢もほぼ定まったので、4月21日をもって大総督府を江戸城に移し、今後の処置に当たることになったが、とりしまり 江戸市中の取締は、開城後もなお勝らにこれを一任していた関係から、たしな 参謀の西郷隆盛は、敢えて彰義隊の乱暴をちんぶかいさん 咎めず、勝らにこれを鎮撫解散させようとしていた。

かくおういん ぎかん い ぶん 覚王院義観の言い分

しかし、彰義隊の連中は、せつゆ まった 勝らの説諭に全く従わなかったのみか、ついにやまおかつたろう 山岡鉄太郎が、むね 大総督の旨を受けて上野に至り、この解散を命じるに及ぶと、かくおういん ぎかん かえ のし 覚王院義観は却って大いに彼を罵って、恩を知らない徳川のぞくしん 賊臣であると言った上に、せせん 徳川家の祖先がここに寺を建てて、だいだいこうぞく むか 代々皇族をお迎えしておいたのは、今日のような場合にこそこれを奉じて起つ用意であったと言ってその命を拒んだ。

まことにどうり わきま むほう がんめい きわ 道理を弁えない無法な言い分であって、頑迷もまた極まっていたが、でもなお寛大な西郷は、江戸市中の交戦はなるべくこれをさ 避けたいと思っていたので、いそ とうめつ そう急いで討滅しようとはしなかった。ところが、うるう おおむらますじろう 閏4月27日に長州藩士大村益次郎が東征軍防事務局判事として江戸に来るに及んで、すみ とうめつ 速やかに討滅すべしとの議を建てると、折から、関東大監察使として下って来ていたさんじょうさねとみ 三條実美がこれに賛成したので、たちま 忽ちその議に一決して、いよいよ5月15日をもって上野を総攻撃することにした。

うえのせんそう 上野戦争

さみだれ ちょうど五月雨の頃の事です。 その日も雨がしとしとと降っていた。

攻撃軍の総指揮官にはみづか 大村益次郎が自ら当たり、さつしゅう ちようしゅう ひ ご ひぜん いなば げいしゅう ちくご 薩州、長州、肥後、肥前、因幡、芸州、筑後、さどはら つ なごや たてばやし くらもんぐち うえのひろこうじ はいご ほんごうだい 佐土原、津、名古屋、館林などの諸藩の兵を部署して、正門の黒門口（今の上野広小路）と背後の本郷台方面とから一斉に上野に突進した。戦いは夜明け方から始まったが、この日の総攻撃は、彰義隊に取っては全く突然のことだったので、市内に出ていて帰ることの出来なかった者や、戦いと聞いてそのまま卑怯



おおむらますじろう むらたぞうろく 大村益次郎 (村田蔵六)

第2話 維新の戦乱

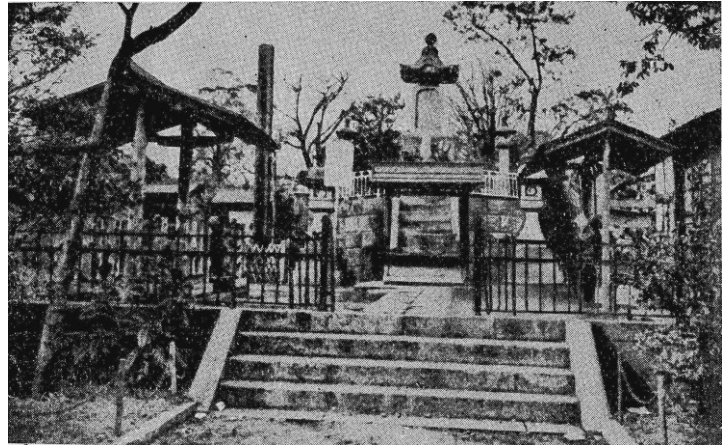
にも逃げ去った者などが頗る多く、実際に官軍に当たったのは、隊員 3,000 のうち僅かに 1,000 人内外に過ぎなかったと言われる。

とはいえ、彼等は別れて上野の 8 門を固め、死力を尽くしてよく防いだので、各方面共に容易に破れず、午前中の戦いは彼等の方こそ却って優勢なくらいでした。しかし午後の 2 時ころ、西郷隆盛の指揮した薩州勢が、肥後、因幡、津の諸藩の兵と共に、こもごも黒門口に肉薄して、猛烈な突撃を敢行したために、ついにここが先づ敗れて、ついで諸門もまた敗れた。

官軍は諸方面から一斉になだれ込んで山を奪い、火を放って焼き討ちした。寛永寺の本坊を始め、付属の子院三十六坊も殆どみな焼け落ちて、総崩れとなった彰義隊は大抵討死した。輪王寺宮公現法親王は遁れて海路を仙台に落延びられた。この戦いを上野戦争といい、又、彰義隊の戦いとも言うている。

こうして上野は一掃されて、江戸は勿論、関東の地は全く平定したのです。

ついでに言いますと、今も上野に在る寛永寺中堂は、明治 8 年、大慈院址に再建されたもので、江戸時代の広大な東叡山寛永寺の建物として名残を留めているのは、僅かに清水堂、五重塔、本坊の門(国立上野博物館の前にある弾痕の多い門)などの 2, 3 に過ぎない。なお、今の上野公園の山王台に在る彰義隊の墓は、この時に戦死した隊員の死骸の一部を葬ったところです。



東京上野 彰義隊の墓

徳川氏の処分問題

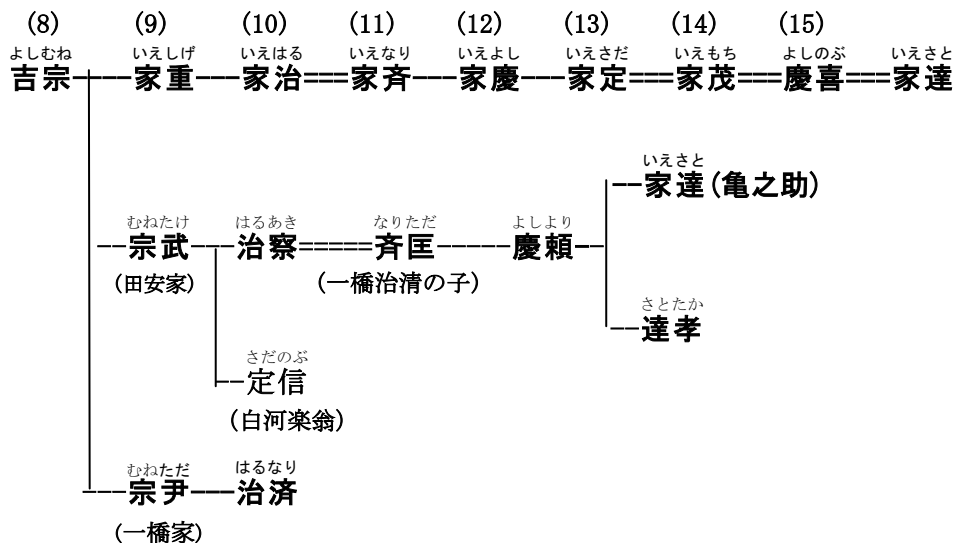
さて、一方、朝廷においてはさきに出された親征の実を明らかにする為に、3月21日に天皇は京都を発輦、大阪に行幸して本願寺を行在所としておられていたが、20余日の後、無事に江戸城を収めた知らせが届くと、乃ち還幸を仰せだされ、閏4月8日に京都に還られた。それで、10日に三職会議を開いて、この時、まだ解決されずにいた慶喜退隠後の徳川氏をいかにすべきかという問題を議したが、結局は決定しなかったため、ついに副総裁三條実美を大監察として江戸に下して、実際の形勢を調査した上で、この処分を決めさせることにした。

徳川氏の減封

よって、実美は江戸城に着くと、閏4月29日に朝命を田安亀之助(後の徳川家達)に伝えて、徳川の本家を嗣がせることにした。城地や禄高については、旧幕臣らの不満不平もあろうかとの懸念から、わざとこれを伝えずに、彰義隊の鎮定した後の5月24日に至って初めて、亀之助を駿河国府中(今の静岡)の城主となし、駿河国一円および遠江、陸奥の地において七十万石を賜る旨の仰せを伝えた。

もと徳川氏の領地高は八百万石と称せられたのですから、実にその一割以下に削減されたのです。こ

の時、朝廷においても、百万石を賜るべきとする者、二百万石、三百万石を賜るべしとするものなどもあったのですが、いづれにしても、旧幕臣らの暴発は免れないとの形勢であったので、七十万石に削減されたのでした。それで、これをもって譜代旗本らの最員の引き倒しであったと言っている者もあります。



さて、上野戦争の結果、関東地方はすでに全く平定し、今また徳川氏の処分も定まったが、奥羽地方にはなお戦乱が相ついで起こっていた。

まつだいらかたもり きんしん あいづせいとう
松平容保の謹慎と会津征討

これより先、会津藩主松平容保は、前將軍慶喜に従って大阪から江戸に帰ると、間もなく慶喜が上野の大慈院に移って、飽くまでも恭順の意を表したために、慶応4年（明治元年）2月16日、江戸の藩邸を出て会津に帰り、容保もまた謹慎して罪を待っていた。

ところが、朝廷では、会津をもって佐幕派の中心と見做していたので、是非ともこれは滅ばさなければならぬと評議一決した。それで、奥羽の諸藩に令を下して会津を撃たせる事とした上に、2月26日、九条道孝を奥羽鎮撫総督に、沢為量を副総督に任じ、薩摩の大山格之助（綱良）および長州の世良修蔵らを参謀として、薩長の兵少許を率いて奥羽に向わせた。



あいづ まつだいらかたもり
会津藩主 松平容保

せんたいはん あいづ どうじょう
仙台藩の会津同情

それで、一行は3月2日に京都を出発し、大阪から海路を取って同月20日に陸前（宮城）の松島に上陸すると、九条道孝総督はすぐに令を仙台藩主伊達慶邦に下して、会津征伐の先鋒とさせた。ところが、慶邦は、元来、会津の同情者で、すでに容保のために、その謹慎の実情を述べて征伐の中止を奉請したことすらあったほどなのですが、今は朝命であるので、よんどころなく出兵の令を発して、諸隊の部署を定め、順次仙台を出発させた。3月25日の事です。

よねざわはん あいつ どうじょう
米沢藩の会津同情

そこで、九条総督は世良参謀らと共に28日に仙台に入ると、たまたま米沢藩主上杉齊憲の家臣らが来て、世良参謀に面会して、会津の容保が前非を悔い、謹慎して命を待っている以上、兵をうごかさなくとも鎮撫することが出来ように、と言った。無益の戦乱を起こす必要のないことを説いたのです。ところが、世良参謀は大いに怒って、米沢藩が異議をいうなら会津と同罪にするだけだ、と叱りつけ、すぐに帰って戦争の準備をして、九条総督が米沢に移って諸軍を指揮するのを待てと言った。

こうして九条総督は4月12日に仙台から移って岩沼に本営を置き、沢副総督は別に庄内藩（山形県鶴岡）を征討するため、14日に大山参謀と共に出羽に赴いた。世良参謀らは15日に郡山に向かい、仙台藩の兵もまた次第に会津の方面に向って進んだ。

しかし、この時、会津藩では家臣を米沢にやって、降伏、謝罪の儀を申し送ったので、米沢藩は仙台藩と共に書面をもってこれを九条総督に通じた。けれども、この時もまた世良参謀らは会津藩の誠意を認めず、却って仙台藩の兵らに進軍を命じた。

あいつはん たんがん どうほくれっばん どうじょうたんがん
会津藩の歎願と東北列藩の同情歎願

しかも、会津藩では、更に家老が連署して嘆願書を差し出したので、勿論、これを尤もな事を認めた仙台、米沢の2藩主は、両藩の家老の連署で、書面を九条総督に送って休戦命令を出されるようにと請うと共に、同じく家老の名で、奥羽の列藩に檄を飛ばして、各藩の家老を白石（宮城南部）に会合するようにと求めた。

そして、これに応じて20余藩の家老が白石に集まると、閏4月11日に2藩主は親しくこの会合に臨み、その家老らに、恭順、謝罪の実情が明らかである会津藩のために、共に請願書を差し出すべきことを提議させた。

列藩の家老らは皆これに賛成して、すなわち嘆願書に記名調印した。

そこで、仙台、米沢の2藩主は、会津藩の嘆願書に、自分ら2人の嘆願書および会合した諸藩の嘆願書を持って、翌12日、九条総督に会い、つぶさに事情を述べて、会津征伐の中止を請うた。総督はこれを受けて、1週間以内に決答を与えようと約束した。

たんがんしよ きやつか
嘆願書の却下

ところが、この時も参謀の世良修蔵が、飽くまでも嘆願の採用を不可としたので、同月15日、ついに総督府から仙台、米沢の2藩主に向って嘆願書を却下した。のみならず、2藩主を促して、会津征伐を急がせようとしたので、奥羽の人心はここに大いに激昂して、世良修蔵をひどく憎んで、ひそかにこれを除こうと謀り、ついに同月19日の夜、仙台藩士らが福島の旅館に泊まっていた世良を捕らえて斬り殺した。そして、その際、彼が持っていた、秋田にいる大山参謀に宛てた、彼の書面によって、彼が奥羽の列藩を皆敵と見て征伐しようとしていたことを知った。奥羽人の激昂は更に一層甚だしくなり、つい

第2話 維新の戦乱

に5月3日、諸藩の家老は再び仙台に会合して、更に盟約を固め、この上はいさぎよく薩長を向こうにまわして雌雄を決そうとするに至った。

奥羽列藩の反薩長気分

しかし、ここで少し注意しておきたいのは、彼等が官軍に対して反抗の態度を執ったとはいえ、朝廷に対して叛こうなどという心はいささかも無かったことです。却って彼等は、薩長こそ名を官軍に仮りて、私心を逞しくするものであり、この偽官軍を撃ち破って、忠義を朝廷に尽くさなければと信じたのです。それでこそ、この誓約書にも、「同心協力、上、王室を尊び、下、人民をあわれみ、皇国を維持して宸襟を安んぜんと欲す」といっていた。実に官軍の参謀らが寛大な心を失っていたために、怒らせなくともよい奥羽の列藩を怒らせ、しなくても済んだ所謂奥羽戦争を、約五ヶ月もしなければならぬようにしたのだと言ってもよいのです。

さて、奥羽列藩の同盟が出来て、総督の指図に従わなくなったために、もともといくらかも軍勢を率いていなかった九条総督は大いに困った。出羽のほうに行っている沢副総督の一行は更に一層困った。一時は、どこにも身を寄せるところがなくなって、止む無く蝦夷地に赴こうとさえしたくらいでした。

同盟軍の盟主

しかも、この同盟が出来ると共に、北越の諸藩もまた起って、これに応じたために、同盟軍の勢いはますます振るい、戦争の場面も従って頗る広くなって来た。のみならず、更に後には、さきに上野を遁れて奥州に下られた輪王寺宮公現法親王が、例の覚王院義観の勧めを容れて、同盟軍の盟主となり、令旨を下して薩摩藩を討たせる事となったので、奥羽の形勢はいよいよ容易ならぬ事になって来た。

官軍の白河城死守

これより先に官軍では、先に宇都宮で大鳥圭介らを走らせた東山道軍の先鋒が、進んで5月朔日に白河城を陥れて、参謀伊地知正治らがこれを守っていたが、間もなく奥羽列藩の同盟が出来たので、その後、一歩も先へは進めなかった。その上にこの地が奥羽の咽喉に当たる要地であったところから、奥羽軍がしばしばこれを取返そうとして進撃して来て、官軍はこれを死力を尽くして辛くも却けているのが精一杯でした。

大規模な征討軍

そこで、朝廷においては、更に大規模な征討軍を遣わす事となり、有栖川宮熾仁親王を改めて会津征伐大総督に補され、岩倉具視を奥羽征討白河口総督とし、高倉永祐を越後口総督となしたが、ついで岩倉をやめて鷲尾隆聚を奥羽追討総督とし、ついでまたこれを参謀に転じて、正親町公董に代わらせた。

けれども、なお功を奏さなかったので、更に仁和寺宮嘉彰親王を会津征伐越後口総督となし、さきに山陰道鎮撫総督としてその方面を平定した後に、北国鎮撫使として越後の高田に下った西園寺公望らを参謀として、越後口から会津を征伐させた。その上に四條隆歌を平潟口総督として、常陸の方面から浜街道を仙台に向わせ、又、大納言久我通久を東北遊撃軍将として、これにも赴き援けさせるというように、

第2話 維新の戦乱

官軍は薩長をはじめ諸藩の兵凡そ 100,000 を以って諸方面から次第に奥羽を圧迫して行った。

一方、仙台から逃れて、辛くも出羽の久保田（秋田）に着いた九条総督もまた、折からの、久保田藩（藩主佐竹義堯）での勤王党の勢力挽回によって、ここに迎えられることとなった。その上に、能代港で蝦夷地に渡ろうとしていた沢副総督の一行も、ついでここに来て会ったので、この方面にもまた初めて官軍の根拠地が出来た。

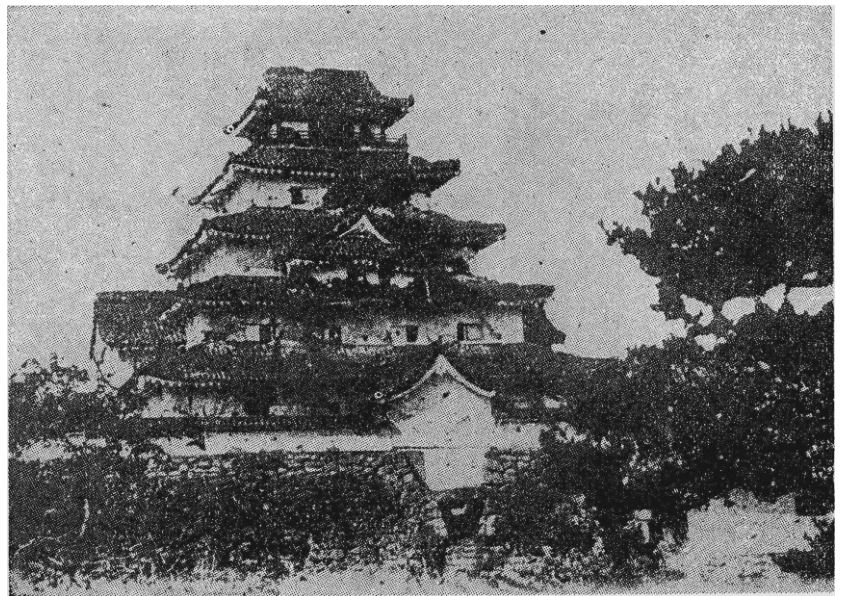
官軍の進撃

こうして官軍の勢いは、これより各方面とも大いに振るった。先づ庄内には久保田の藩兵を先鋒として南下させたし、越後口の方でも、最も頑強に抵抗していた長岡藩が、北越の俊傑として勇名を一世に轟かせた家老の河井継之助が重傷を負って斃れた。頓にその勢いが挫けてからは、官軍は破竹の勢いとなり、一軍を庄内に北上させると共に、一軍を会津、米沢の方面に続々と向けさせた。8月中旬のことです。

若松城の死守

このころ、奥州方面の官軍もまた、既に泉、平、棚倉、中村、三春、二本松、福島などの諸城を陥れて、白河口および平潟口の2軍は合してますます其の勢いが振るっていた。

それで、参謀の板垣退助、伊地知正治は相談して、先づ根本の会津に全力を注いでこれを陥れ、然る後に仙台や米沢に向うことにしようと、乃ち、急に薩長、土佐、大垣、佐土原、大村などの諸



福島 在りし日の若松城
(明治7年に取り壊したときの記念撮影)

藩の大兵を進めて、会津に向い、8月23日には越後方面からの官軍と相呼応して若松城を囲んだ。

かの有名な少年の白虎隊が悲壮な自殺をして、日本武士道の精華を顕したのは実にこの日の事です。さて官軍は、これより連日城に向って攻撃を加えたが、城兵は少しも屈せず、苦戦奮闘しながら、ついに籠城30日に及んだ。

ところが、9月4日になり、米沢藩は、とても官軍に敵し得ないことを悟って、謝罪書を越後口総督府に呈して降伏を請い、9月15日には、仙台藩もまた謝罪状を平潟口総督の軍門に呈して降伏を請うた。そこで、奥羽の同盟は自然と解消して、他の諸小藩もまた官軍に降ったので、会津は全く孤立無援の状態に陥った。

おううちほう へいてい
奥羽地方の平定

とかくするうちに若松城は、籠城すでに1ヶ月、四面共に全く交通を絶たれて、糧食も乏しくなれば弾薬も将に尽きようとして来た。ところへ、すでに官軍に降った米沢藩や仙台藩から、しきりに使いをよこして降伏謝罪を勧めて来たので、城主松平容保もついに意を決して、9月22日、城を出て降を請うた。この時まで容保と共に籠城していた者は、藩士480余人、および諸藩の脱走兵460余人でした。

仙台に居られた公現法親王も、すでに周囲の情勢が斯うなつては如何ともしようがなかったので、この日、使を四條総督の軍門に遣わして謝罪書を出された。

庄内藩もまた翌23日に官軍に降った。

こうして奥羽地方は全く平定するに至ったので、10月18日、白河口総督の正親町公董が先づ東京に凱旋すると、大総督有栖川宮熾仁親王は、同月23日、奥羽平定の事を奏上して大総督の任を解かれん事を請われた。

これより先、9月8日(慶応4年)に朝廷は一世一元の制を定め、この日をもって年号を明治と改められた。10月13日には天皇は行幸して東京にお着きになり、同日、江戸城を東京城と改めて、これを皇居としてご滞在中でしたが、11月2日に詔して熾仁親王の功を賞され、同時にその任を解かれた。

しよそうとく がいせん れっばん しょぼつ
諸総督の凱旋と列藩の処罰

こうして同月4日には越後口の総督嘉彰親王も凱旋され、15日には平潟口の総督四條隆歌、18日には奥羽鎮撫総督九条道孝、副総督沢為量が凱旋した。そこで、12月7日に新政府は奏請して奥羽北越諸藩の処分を行った。

先づ会津の松平容保は、死罪一等を減じて永禁固に処せられ、その領地は没収された。(しかし、後に至って、その子の容大に家名を再興させ、陸奥の斗南で三万石を給した。) 仙台藩は六十二万五千六百石を二十八万石に減ざれ、南部藩は二十万石を十三万石に、庄内藩は十七万石を十二万石に減ざれ、米沢、二本松、長岡、その他の諸藩も、それぞれ処罰された。又、この日、これまでの陸奥、出羽の2国は広すぎるからと、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の7国に分けられた。

こうして東北地方も全く平らぎ、日本の内地はことごとく新政府の下に一統されたが、10月26日、旧幕府の海軍副総裁榎本釜次郎らが函館の五稜郭を占領して、やがて蝦夷地(北海道)の全部をその手に収め、これの開拓、経営を彼等に許す事を朝廷に嘆願するという事態が起こった。

えのもとかまじろう えぞけいえいけいかく
榎本釜次郎の蝦夷経営計画

はじめ、幕府の軍艦を朝廷に納めた時に、4隻を徳川家に残して、これの監督を榎本釜次郎に一任したことは前に述べた。元来、この榎本は、強硬な主戦論者でしたので、その後も、品川沖で船艦を監督しながら、ひそかに形勢を觀望して徳川氏のために謀ろうとしていた。ところが、彰義隊も敢無く一戦に敗れて、江戸にはもはや佐幕派の足場が無くなったので、蝦夷地を徳川氏の領地に請い受け、だれが徳川

第2話 維新の戦乱

氏の血筋の一人を主君に奉じて、その経営に当たろうと計画していた。その折、奥羽列藩の同盟が出来て、しきりに榎本の来援を求めて来た。

そこで、8月19日の夜、彼は軍艦、汽船、帆前船、すべて8隻を率いて品川湾を脱した。途中、大暴風雨に逢ったりしたため、予定よりおくれて、同月26、7日に松島に入港、9月の中旬に上陸して仙台に入った。ところが、この時は、すでに奥羽の同盟が瓦解し、若松の孤城が独り重囲を受けている時であって、かれこれするうち、会津も、庄内も、その他の諸藩も、公現法親王も皆謝罪降伏するに至った。

それで榎本は、もはや内地では如何ともしようがなくなったのを知り、旧幕府および奥羽越の諸藩の脱走人中、飽くまで官軍に降るをいさぎよしとしない者数百人を部下に加えて、予ねて計画していた蝦夷地の経営をしようと、これに関する趣意書を平潟口総督四條隆歌に呈しておいて、総勢3,000余人を7隻の軍艦、汽船、帆船に分乗させると、10月7日、錨をあげて函館に向った。

下野の今市を落ちて以来、会津で勇ましく戦っていた旧幕府の歩兵奉行大鳥圭介を始め、土方歳三、古谷作左衛門、人見勝太郎らの旧幕臣もまた、この時、仙台に逃げて来ていて、榎本と共に函館に向ったのです。

榎本らの函館占領

こうして10月19、20日の両日に、榎本の率いた船艦は、函館の東北方約52kmの鷲木村に入港した。しかし、彼等が来島の趣旨を函館の府知事清水谷公考に訴えようとして出した使者の一行を、公考の遣わした兵が、不意に途中で襲ったために、嘆願書を出す暇もなく、やむなく応戦したのが開戦の緒となり、ついに官軍のほうに連戦みな破れて、公考は青森に逃げた。

仮政府の組織

そこで、榎本、大鳥らは函館奉行の政庁である五稜郭を占領して、これに拠って、更に松前、江刺などをもその手に収め、徳川家からその主を迎えるまでの間、仮に政府を組織することにして、それぞれ職員を選定した。即ち、総督には榎本釜次郎、副総督には松平太郎、陸軍都督には大鳥圭介、海軍都督には荒井郁之助、函館奉行には永井尚志、松前奉行には人見勝太郎、江刺奉行には松岡四郎次郎、開拓奉行には沢太郎左衛門が当たるといように、それぞれ担任を定めた。海陸の兵備を厳にして、函館駐在の各国領事およびイギリス、フランスの軍艦の将士らとも応接して、外交、貿易はこれまでのきまりによって行うことにした。いわば、一つの独立国の体裁を具えたのです。

榎本らの歎願書

とはいえ、勿論、彼等に京都の新政府に対抗しようという意志があったのではなかった。ただ、徳川氏が200余年にわたって養って来た家臣は300,000余もあるのに、今度の駿府の七十万石では、とてもこれを養うことは出来ないのは明らかであるから、ここに徳川氏の領地を賜り、路頭にも迷おうとしている家臣らをして、開拓を行い、今後、永久に北門の警護に当たろうというのがその素志だったのです。それで、この事を嘆願書に認め、英仏の艦長に託して朝廷に上ったが、それには、1つには皇

第2話 維新の戦乱

国のため、2つには徳川のため、同じく尽くすところと忠誠を憐れにおぼしめして、願意をお聞き届け下さるようにと書いていた。

函館征討

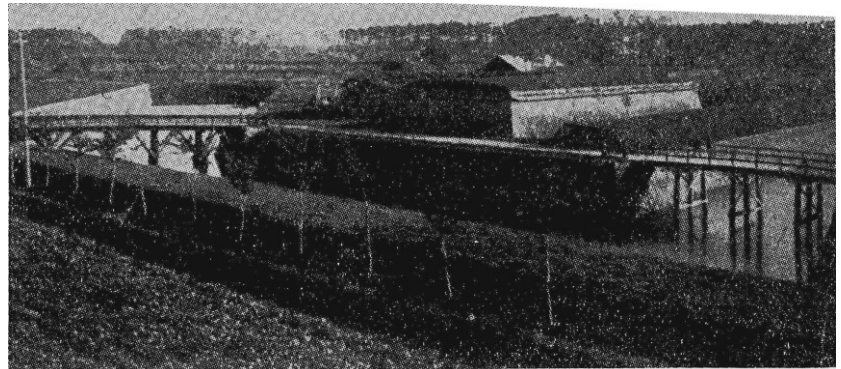
しかし、官軍を逐って、武力をもって占領した彼等に対して、朝廷がこの嘆願を許すはずが無かった。却って、早速、追討の方策を講じたが、折から、寒い冬の真最中でもあったので、翌明治2年3月に至って、はじめて黒田清隆、山田顕義、中牟田倉之助、赤塚源六らの諸将に薩長その他の兵を率いて討伐させることにした。

それで、3月9日、討伐軍は8隻の軍艦に乗り込み、品川湾を発して函館に向かい、前年以来、青森地方に駐屯していた清水谷公考の率いる軍と力を合わせて、4月に海陸から脱走兵を討つて、次第に諸城を復し、5月11日についに函館を収めた。

さきに近藤勇が捕らえられて斬られて以来、ずっと大鳥圭介と行動と共にした新撰組の土方歳三も、ついにこの日、官軍に占領された函館を奪い返そうとして奮戦しているうちに、銃丸に中って、馬から落ちて死んだ。

榎本らの降伏

こうして、脱走兵の手に保っているのは、今はただ五稜郭のみとなった上に、その兵も次第に減じて、僅かに数百に過ぎなくなったので、榎本をはじめ一同は、城を枕にして潔く討死する覚悟でいたが、官軍の黒田清隆が、わざ



函館

五稜郭の残壕

と攻撃を緩めて、降伏させようと大いに力めたので、ついに5月18日、榎本釜次郎、松平太郎、大鳥圭介、荒井郁之助、永井尚志らの首領は、自分たちで罪を引き受け、兵士らを助けることを条件として、五稜郭を出でて降った。

包囲戦中の美談

この降伏の直前の事であるが、黒田がしきりに使をやって降伏を勧めたのに対して、榎本は潔く戦死するからとして固くこれを拒絶すると共に、自分が嘗てオランダに留学して得たところの海軍全書2巻を、わが国にはまたとない貴重な書物であるのに、兵火にかけるのは惜しいからとて官軍に贈った。官軍ではまた大いに榎本の心掛けに感服して、謝意を表した書面に酒5樽を添えて榎本に贈り、ながながし陣の労を慰めた話がある。美談ともいうべきである。

すでに戦死を覚悟した榎本が、わが海軍の将来を思って、大事にしていた書物を官軍に贈ったのも、又、黒田が榎本の人物を惜しんで、是非ともこれを助けようと、あくまで降伏を勧めたのも、思えば、共に日本国を愛する同胞であって、たまたまその置かれた立場の相違から敵対し合った一点だけを一掃すれ

第2話 維新の戦乱

ば、あとは双方共に朝廷に対して忠誠をつくす臣民にかわりはなかったからです。

ぜんこくへいてい 全国平定

これより先、開拓奉行沢太郎左衛門は、200余人を率いて室蘭に移り、すでに開拓事業に着手していたが、今、榎本らの降伏を知ると、6月12日に至って彼もまた官軍に降った。そこで、蝦夷地は全く平定した。実に王政復古の発せられた慶応3年12月9日から言えば、約一年半の後に全国がことごとく平定したのです。世に鳥羽伏見の戦い以後の諸役を総称して維新の戦乱と言ひ、又、戊辰の役といっています。その大部分が明治元年（慶応4年）に起こったので、その干支によって呼んでいます。

なお、蝦夷地が平定すると、朝廷では、7月8日にここに新たに開拓使を置き、同月13日に、それぞれ長官、次官などを任じたが、更に8月15日に至って、蝦夷地を改めて北海道を称し、全道を分けて渡島、後志、石狩、天塩、北見、胆振、日高、十勝、釧路、千島の11カ国とした。

えのもと しやめん 榎本らの赦免

また、降伏した榎本、大鳥以下の首領らは、いづれも斬罪を覚悟していた。しかし東京において入牢させられているうちに、例の黒田清隆が極力斡旋して寛大説を唱え、ことに榎本の助命を嘆願したところから、ついに明治5年正月以後に至って、いづれもその罪を赦されたのみならず、後には次第に新政府に重く用いられた。なお、榎本、大鳥の2人については、後にまた皆さんにお話する機会があります。

(第2話 維新の戦乱 終わり。 次は前頁に戻り、第3話 明治初代の内政)